
U - N a

幼ゐこみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

U Na

【Nコード】

N9333X

【作者名】

幼ぬこみ

【あらすじ】

幻覚、とくに幻聴にはいつも悩まされてきた。「わたしが見ている世界と、友達の見ている世界はどうして同じじゃないの？」わたしはいつも考えていた。更新は毎週水曜日の予定です。

モノローグ 1 1

昔、鏡の中の自分が話しかけてきた事がある。

ちょうど、同じくらいの子がわたしを見つけて話しかけてきてくれた時みたいに、鏡の中のわたしは、わたしに話しかけてきた。覚えてるのは、向かい合わせのわたしたち達の姿。話していたのが何なのかは覚えていないけれど、不思議と親しみが持てて、わたし達はずぐに友達になった。

そんな彼女と真の意味で会えなくなってしまったのは、この話を誰も信じてくれなくなってからしばらくのことだった。

夢と現というのは、もしかしたら、ちょっとした認識の変化ですぐに変わってしまうものなのかもしれないなって思ったのは、ささいな事がきっかけだったのだと記憶している。

そのささいな事がなんだったかは、忘れてしまう程、どうでもいい事だったようで、わたしの中には概念しか残っていなかった。

だから、少なくとも、この概念が鏡の中のわたしとは関係ない事は分かってる。ただ、「鏡の中のわたし」のように、現で感じる不思議は記憶しきれないほどいっぱいあったのは事実だ。

もしかしたら、わたしが記憶していることのいくつかは、現ではないのかもしれない。そう思うと、少し寂しくて、少しほっとした。だけど、全部幻だと言って蔑にするのもどうかしている。なにが本当かなんて、どうせ分からないのだから。

幻なら幻の中で生きていったっていいじゃないか。

そう思うと、生きていくのが、ずっとずっと楽になった。

例え、皆とつまく打ち解けられずに、影でこそこそ笑われていたとしても……。

エピソード1 1 吸血鬼

昔から人々の間で伝わっている神様だとか悪魔だとか妖怪だとか魔物だとか精霊だとか幽霊だとかは、いるかどうかは分からなくても、いないなんて断言出来ないとわたしは思っていた。

その理由は、わたしの乏しい脳みそに、「全ての現象は科学的に証明できるものだ」と断言できるほどの知識や発想が備わっていないからだったりもするけれど、それだけじゃなくて、幻覚に悩まされる事が多いからでもあった。

それを霊感っていう人もいたけれど、霊能力があるという人みたいにかくさん幽霊が見えるわけでもないし、怖い思いとかもありしたことないから、多分、違うのだと思う。

そして、その幻覚は、今もわたしの頭を苛んでいた。

「いらっしやいませ、ご注文は……」「きゃはは……だって……あの男……」「まじうぜーし、しね」「ありがとうございます、一生懸命がんばりま……」「待つて、いかないでよ、もっと……たい」「君はどうしてそんなに怯えているの?」「あはははははは……ははは……あははははははは」「違う……殺さ……彼女は……死……」「呪ってやる」「ありがとう、ありがとう、ありがとう」「その角を曲がって……」「ねえ、買ってよ、買ってば!」「うう……うううううう……うううううう」「あの家の息子さん……なんだって」「いやだー、それって……なのね」「馬鹿にするなよ」「くずどもめ」「聞いてよ、今日ね、クラスの子がね……」「お母さん、ねえ、お母さん?」「

「ああ、もう……うるさい……な……」

耐えきるので精一杯。そう、これらが全部、わたしの耳に聞こえている声。ちゃんと覚えているわけじゃないし、あやふやだけど、何かの発作のようにこんな声が聞こえてくる時があって、すごく気持ち悪いし、すごく苛々してしまう。

「ただいま、あれ、誰もいないの?」「ありがとう、ねえ、聞いている?」「おおい、おおい、聞こえているかい?」「あなた、あれを見たの?」「今日は何にしようかな?」「あれ、なに?」「ありがとう、ありがとう」「大好きだよ、愛して、ねえ、愛してよ」「可愛い服、どこで買ったの?」「あの人……っていう噂があつてね……」「気持ち悪いねー」「苦しい……苦しい……」「うつつつつ、うつつつつ」「ユウナ……」「ユウナ、ユウナ、ユウナ……」「ユウナ……」「なんだあれ、むかつくなあ」「ユウナ……ユウナ……」「あははははは、あはははははははははははははははは」「聞いてよ、昨日彼氏がさあ……」「ユウナ……ユウナ、ユウナユウナユウナユウナユウナ」

「ああ、もう、わたしの名前を呼ぶな……!」

わたしの名前はユウナ。

今でこそ普通の名前だと思うけれど、小学校低学年くらいまではしよっちゅうからかわれた。言うな、言うな、って。今考えたら、かにかいにすらなっていないのに、その時は本当に嫌だったのを覚えている。子どもってささいなことでも深刻に受けとめたりするんだなっと思う。

さて、そんなユウナっていうわたしの名前を呼ぶ相手は、勿論、見えない。それに、この声は複数のもので、誰が誰かなんて分からないし、名前を呼んでくる声も様々あった。

なんで名前を知っているのかって考えた事もあつたけれど、もしも

これがわたしの幻覚なのなら、わたしが造り出しているのだから、わたしの名前を知っていて当然だ。

重要なのは理由などではなくて、この声がわたしの頭と心のゆとりを非常に効率よく削いでいってくれることだ。

本当にいるかい。

全てを壊したくなるくらい。うるさい。うるさい。うるさい。うるさい。うるさい。さくて仕方がなくて、涙が出てくる。でも、誰にも分かって貰えない。誰も理解なんて出来ない。このうるさに耐えかねて何かしら反応してしまうと、周りの人達は決まって気味悪がるか、馬鹿にするかのどっちかなのだ。

$$\dots, n, n+1, n+2, \dots$$

家に居ても、外に居ても、そのうるさは変わらない。だから、わたしは、暇な時はよく公園に居る。夜の公園にぼつんと一人座っている。怖い目に遭う時だってあるけれど、こうでもしなければ落ち着かなかつたから、この習慣はやめられなかった。

だから、その日も、わたしはいつも行く公園でうるさい声に頭を抱えながら入っていった。夜の公園の東屋の椅子が空いていれば、わたしはいつもそこに座る。

だけど、その日は、先客がいた。長い髪にウェーブをかけた美しい女性。夜と月光が似合う静かな趣の女性。どこか寂しげなその雰囲気は、その日のわたしの目に焼き付いた。彼女はわたしの存在に気付くと、ふとこちらを見つめた。目があつて、わたしはどぎまぎした。本当に美しいのだ。テレビの中の人みたいだった。少なくとも、わたしの周りにはいない。

「あなた……」

夜の公園に声が響いた。幻聴じゃない。彼女が言った事は明らかだった。

「あなた、いい香りね」

静かで気着心地のよいその声は、夜風のせいで消え入るようだった。しばしわたしの姿を見つめていた女性の姿は、やがて、わたしの視界からすつと消えてしまった。まるで、夜の風が攫っていったかのようだった。わたしはしばらく何が起こったのか分からず、じつと彼女が座っていた場所を見つめていたけれど、しばらくして、やつと理解した。

ああ、あれは、幻覚だったのだ。

エピソード1 2 吸血鬼

わたしが夜の徘徊をするようになってしまったのは、中学校に入ってからずっと家庭にも学校にも居場所がないと感じるようになってからだ。

もちろん、夜の町にもわたしの居場所なんてなかった。

わたしは小学校以来ずっと居場所を作ることが出来なかった。どうやったら作れるのかも分からないし、どうして作らないとこんなに寂しいのかもわからなかった。

だけど、夜の静かで綺麗な空気を吸いながら当てもなく歩いて行くのは、とても気が楽で、悲しい気持ちや孤独や集団だとかのこたわりも薄れていって、まるで夢や小説、映画、舞台、ネット、ゲーム美術みたいになわたしを非日常に導いてくれた。

そればかりに頼ってはいけないってことは分かっていた。だけど、分かっていたけれど、わたしはこれを止められないまま、中学校を卒業した。その後もずっと、わたしの徘徊癖は治っていない。

親はもう心配していない。中学生の頃はよく衝突していたけれど、この歳になると、もう諦められていた。夜の徘徊をしていていいことなんて、特にない。気がまぎれることくらいだろうか。むしろ、危ない目に遭う事の方が多かった。行く場所なんて限られているし、音楽でも聞いていなかったら、すぐに飽きてしまいそうなくらい何もなかった。むしろ、音楽を聴くために歩いているようなものだった。

行く場所と言えば、そう、公園。行く度にわたしは、いつか見たあの美しい女性がいなかを期待している。おかしいことだけど、わたしはあの女性に興味を持っていた。月に照らされて何かを考えて

いるようだった切なげな雰囲気の彼女が、とても美しくて堪らなかった。

もう一度見たい。

気付けば、わたしは強くそう願っていた。

「ユウナ……」「おいで」「ユウナ……」

公園に入った時、少し離れた所から呼ぶ声がした。誰もいない公園だ。だけど、複数の声が混ざったような感じ。イヤホンで音楽を聞いているわたしの耳に聞こえるのだ。いつもの幻聴に決まっている。それに、わたしの名前を呼ぶ者なんて、家族以外だったら幻聴ではない。いちいち構っていても悪化するだけ。構わなくても悪化することはしばしばあるけれど、きりがなから気にしない方がいい。誰が呼んでいるのか、どこに来いと言うのか、そんなこと考えたって、くだらないじゃないか。

「ユウナ……」「待ってたよ」「おいで……」

心なしか、声が近づいてきた。それとも、わたしが近づいているのだろうか。わたしが向かっているのは、いつも座る椅子。あの日、美しい女性が座っていたあの椅子。だけど、今日も誰もいない。このところ、夜の公園にはカップルも放浪者も若者も訪れていないようだった。

わたしは椅子に座って、ぼんやりと前を見ていた。本当に誰もいない。こんな静寂は勿体無いくらい美しい。イヤホンをつけたまま、わたしはじつと空を眺めていた。ちらりと見える空。公園の外灯が邪魔で、星は少ししか見えない。それでも美しいのが夜空。

風が少し冷たかった。もう秋だから、当り前のこと。わたしは空をただ見つめていた。考え事も何もない。ただ余っている時間を潰すだけの時間。寝ている時も、食べている時も、働いている時も、休んでいる時も、遊んでいる時も、わたしは単純な思考しかしていない。それは、今も同じ。

「ユウナ」

声がすぐ傍で聞こえた。幻聴に決まっている。だって、わたしはイヤホンをしているのだから。だけど、その幻聴は、背後で聞こえた。幻覚というものは、まるで本物のようでよく惑わされる。幻覚なんて小さい頃から感じていたけれど、ずっと幻覚だと気付かなかった事とかも一杯ある。

例えば、さんざん幻覚だと自分に言い聞かせている今も、ひよつとして、本当に誰か後ろに居るのではないかと、わたしに思わせるほどリアルだった。

だから、わたしが振り向いたのは、たまたまだった。ひよつとしてという思考がそうさせた。そして、そんな些細な動機が産んだ行動は、数秒後にわたしの身体を硬直させた。

幻覚というのは、自身の頭が造り出しているものだとなんか思っている。自分が何に影響されているのか、自分の心を占めているものは何か。考えを支配している要素は何なのか。それらが不穏な動きをした結果、幻覚という形で自身の外へと飛び出してくるように見える。

……これも、幻覚の一つなのだろうか。

そうだとしたら、あまりに悪趣味で、自分自身の頭を心配せざるを得ない。わたしはいつの間に、清々しい公園にこんなグロテスクな化け物を召還させる病んだ人間になってしまったのだろうか。

そう、目の前に居たのは、まさに化け物だった。

視界から得る情報はとても多く、そのいくつかは錯覚を引き起こす。化け物の容姿を視界にとらえたわたしの頭は、さまざまな錯覚を引き起こした。

まずは、臭い。さっきまでの澄んだ空気が嘘のように、異臭が立ち込めていた。吐き気すらもよおすその生臭い匂いに、わたしは鼻と口を手で覆った。次に、声。猛獣の呼吸音、そして、唸る声。そして、何やら気持ち悪い音が聞こえる。化け物が動く度に、身体の端々から泥のようなものが落ちていくのだ。

「ユウナ……」

化け物が喋った。わたしの名前を呼ぶと言う事は、わたしの作りだした幻覚に違いない。だとしたら、わたしはどうしようもなく病んでいるのだろうか。少なくとも、これを正常だと言える自信はない。

わたしは、硬直したまま化け物を見つめていた。

モノローグ 1、2

電化製品の裏には、妖精がいる物だと思っていた時期がある。

いつ頃だったかは思い出せないけれど、別に本で読んだのだとかテレビで見たのだとか誰かに聞いたのだとかいう話だけではなくて、本当にそう思ってしまうような出来事が記憶として残っていたからだ。

そこにいたのは、確かにわたし一人。場所は台所。わたしはいつも隠れてチーズを盗んでいた。とあるアニメでネズミがとても美味しそうにチーズを食べているのをしょっちゅうみていたので、わたしも隠れてチーズを食べてその美味しさを定期的に楽しんでいたからだ。

その日も、隠れてチーズを食べようと台所に忍びこんでいた。台所には一人だったけれども、他の部屋には点々と人がいた。母だったり、祖母だったり、従兄弟だったり。だから、いつばれないかと心配しながら忍び足だった。

その時だ。泥棒と化しているわたしが、電気炊飯器の前を通った時、炊飯器が置いてある台がガタガタとゆれて、「きやはははははは」という子どもの笑い声が聞こえたのだ。

驚いたわたしは台の裏を覗いた。誰もいないどころか、子ども一人入りこむスペースなんてない。子どもの笑い声も、台の揺れも、わたしが覗きこむと同時に収まったけれど、それからずっと見られている緊張みたいなものが取れなくて、わたしはチーズを盗むのを辞めた。

だけど、それから後、その家が壊されるまでの間、わたしがあの声

を聞くことは二度となかった。

きつと、その頃から確かに、わたしは幻聴に取り憑かれていたのだと思う。

その前兆に過ぎない事だったのだと、今なら分かる。

エピソード1 3 吸血鬼

この場合、わたしはどうしたらいいのだろう。目の前にはグロテスクかつ異臭を放つ化け物の姿。わたしは音楽を止めて、イヤホンを耳から外して考えた。

それが本物かどうかさえも分からない状態で、悲鳴をあげるべきなのか、スルースキルを発動してこの場から立ち去るもしくはこの場に留まっただのんきに音楽と共に夜風を当たり続けるのか、もしくは、化け物をまるで捨てられた子犬か子猫のように撫でまわしたりした方がいいのかなどと迷い始めたりして、わたしの思考はどんどんおかしくなっていく。

困ったものだ。悲鳴をあげるにしても、もうタイミングを逃してしまったし、何よりわたしはドラマやアニメや映画や舞台などでよくある女性の悲鳴というものをあげた事がなかったし、どうやってらあげられるのかも分からなかったので、声にならない声をもらしながら、ただじつと化け物を見ていることしか出来なかったのだ。

だから、もしもここで誰も来なかったら、ひょっとしたら朝までわたしと化け物は見つめ合っていたかもしれない。いやそんなわけがない。万が一、これが本物の化け物だったら、ゲームでいうところの雑魚キャラのように呆気なく命を落としていただろう。

「離れなさいな」

また幻聴だろうか。いつか聞いた聞き心地の言い声。わたしが聞いたかった声。そのあまり、幻聴となって現れたのだろうか。けれど、それは決して幻聴ではなかった。

ふりむいた先にいるのは、いつか見た美しい女性。わたしが意識的にも無意識的にも求めていたあの美しい女性だった。妖艶な眼差しが見つめる先は、わたしではなく、わたしの見ている化け物。化け物はというと、女性の姿を見た途端、わたしに散々見せつけていたあの猛々しさがあっさりと消え去ってしまったので、わたしは驚いた。

「私は待つのが嫌いな」

女性のおっとりとした声に、化け物は慌てて消えた。間違いない。わたしが観たのは本物の化け物。そして、いつか見たこの女性も、ただの幻覚ではなかった。

女性は化け物が消えた場所をじっと見つめ、やがて、わたしの傍へと歩いてきた。わたしの目が疲れているのだろうか、彼女の姿はちらちらと揺らいでいるように見えた。消えては現れ、消えては現れを繰り返しながらわたしに近づいて来ているように見えたのだ。

「あなた、いつかここで会った子ね」

気付けば彼女はわたしのすぐ目の前にいた。

頬に手を当てて、じっとわたしの目を見つめている。月そのもののような彼女。美しい彼女にそうされると、変に火照ってしまう。女性はいじっとわたしを見つめていたが、やがて、自然な動きでわたしの首筋へとキスをした。

生温かい舌がわたしの首筋をなぞっている。その感触はまるで、今から捕食されるかのよう。

「いい香り。あなたの血はどんな味がするの？」

吸血鬼という存在の話は、誰でも聞いたことがあるだろう。

でも、殆どの場合、あれは架空の存在だと言われている。だけど、血を飲まないと具合が悪くなってしまう、血を飲みたい衝動に苦しんでしまう病気は実在する。

この女性が何者かなんて分からないけれど、身の危険を感じたのは確かだった。このまま本当に噛みつかれて、血を吸われてしまうような気がして仕方なかった。

「でも残念、今はお腹がいっぱいなの」

女性はそう言っていると、わたしの首筋から口を放した。

汗が噴き出てきた。命の危険に晒された時に掻く汗なのだろうか。いつもの汗とは質が違った。女性に見つめられているわたしは、見動きすらできない。ただの人間とは思えなかった。もしかして、彼女は人間ではなくて、本当に吸血鬼なのだろうか。そう思うくらいの妖艶さが、彼女にはあった。

「あなたをよそ者に取りられるのは癪だわ」

「あの……」

「あなたにはフェロモンがあるもの」

「えっと……」

「きっと食べ頃のあなたに惹きつけられる者はいっぱいいるはず……」

「その……」

「そうね、命を助けてあげた代わりよ」

女性の見事なディフェンスに、わたしは泣きそうになった。フェロモンをむんむん出しているのは、お前の方だ、だとか、なんでもいから帰っていいですか、などとかいう恩知らず甚だしい事を口にしようとしたのだが、そんな度胸があつたらとつくに帰っている。

「私の店で働いてくれないかしら？」

「……店？」

話しについて行くのがやっとだった。何だか知らないけれど、勧誘されているようだ。だけど、困ったものだ。働けと突然言われて、はい分かりました、と出来ればいいのだが、そうはいかない。

「あの、いきなり言われても……」

「今ここで血を吸われるのと、私の店で働くのとどっちがいい？」

わたしの言葉を遮って、彼女はわたしの首筋で囁いた。軽く噛まれるだけで、計り知れないほどの重圧がかかってきた。これを脅しと言わず、何を脅しというのだろうか。つまり、こういうことだろうか。ここで死ぬか、働くかということなのだろうか。

そもそも、労働内容はなんなのだろうか。とても重要な所だ。人との間に壁をつくるわたしは、一定の作業しか出来ない無能人間の鏡なので、接客などにおける役立たずの度合いで右に出る者はいないと自負している。すごく悲しい自負だ。だから、自分のため、そして、彼女のためにも、承諾する前にぜひとも仕事内容を聞いておきたいのだけれど、彼女の吸血鬼的微笑みを前にして、わたしの口は、わたしが本心で聞きたかった事とは全く違う言葉を発していた。

「分かりました。お店に案内してください」

エピソード1 4 吸血鬼

女性はミチルと名乗った。

ミチルはこの公園の近くで、骨董品を扱った店をしていると言った。なんでも、祖父の代から続いている大切な店なのだそうだ。如何わしい店じゃなくてよかったと思ったのだけれど、それを口に出したら今度こそチャンスはないと分かっていたので、わたしは何も言わずに聞いていた。

ミチルはまた、自分の事を吸血鬼なのと言った。吸血鬼がほいほい名乗り出ていいのだろうかと思っただけで、黙っておく事に越したことはない。ミチルは時々、自分を傷つけてその血を飲んだり、提供者をこっそりと雇って血を得たりしているのだと言った。血の提供者って一体何なのだろう。

「血液って言うのは高いのよ。それなのに、定期的に血は欲しくなるし、昔だったらもつと気軽に人を襲えたのについて何度思ったことか」

夜道でそんな愚痴を聞かされても、と思ったが、例のごとく何も言わないでただ聞いていた。というか、このままついて行って大丈夫なのだろうか。

ミチルに首筋を舐められた時の事を思い出した。命の危険に晒されていた緊張もあってか、とても汗が出た。……いや、この汗はそれだけじゃないことは分かっている。

吸血鬼というものについて、昔、調べた事がある。当時、小説らし

きものを書いたりする事にハマっていたわたしは、吸血鬼ものの物語を考えていて、調べてみたのだ。吸血鬼の伝承だけでなく、関連する事件や歴史など、興味深い事はいっぱいあったけれど、当時、精神的に第二次性徴が著しかったわたしが一番反応したのは、吸血鬼の吸血行為に関する豆知識だった。

そして、わたしが得た知識は、歪んだまとめられ方をしてしまったのである。

——吸血ってエッチなんだね。

「ユウナ、ここが私の店よ」

声をかけられてものすごく焦った。

顔が変に赤くなっていないかとでも心配なところである。いくら冷静になろうとも、それはなかなか難関なことで、わたしの頭の中では、ミチルに助けてもらった時のやりとりが何度も再生されていた。だいたい、フェロモンってなんだ。わたしから何を感じ取って何をしようとしていたんだこの人は。

あのまま血を吸われていたら、と思うと、頭がふわふわになって、手の施しようのない変態のなりそうだ。いかんいかん。なんてことを考えているんだ、わたしは。

「……そういうわけで、ここでは、昔から骨董品を扱っていたの」

ミチルが説明を始めている。なんてことだ。やらしい考えの所為で最初の部分を聞き逃してしまった。でも、少しだけ思い出せるかもしれない。確か、祖父の代から、とか、持ちこんできてもらったものを、とか、リサイクルショップ、だとか……。

ぼろが出そうなので、自分からは何も言わないでおこう。

「で、わたしは何をしたら……？」

「ちょっと、話聞いてた？ 今すぐ夕飯にしちゃうよ？」

さっそくぼろが出た。こんな調子で大丈夫なのだろうか。わたしは長生き出来るのだろうか。

ともかく、そういったわけで、わたしはミチルの店で働く事になった。要するに、ミチルが面倒くさがる雑用をしていけばいいらしい。今までの生活のなかで変えなきゃなんないこととか、これから先の事とか、何気に迫っている身の危険とかを考えるとうんざりしてしまうけれど、「考えても仕方ない事だし、地道に頑張っていくしかないか」と思ったところで、「もう今日は十分頑張った。帰らしてください」と、当てもなく訴えかけた心持だったが、さっそく雑用を押し付けようとしているミチルを前に、しばらくの間、それは叶いそうにないことは明らかな事実だったので、わたしの肩は悪霊的な何かに憑かれたかのようにどっしりと重くなったのだった。

ああ、早く帰って寝たいです。

モノローグ 1 3

自分の体験を他人に話すのは、あまり好きではない。

子どもの頃ならば話すことは出来たけれど、ある程度大きくなっていくと、信じてくれなかったり、ちゃんと聞いてくれなかったり、聞いても面白くないだろうなと自分で思ったりして、そもそも話すということに対してのメリットが浮かばなくなる。

だからこそ、時々その感覚を共有できる人に会えると、多くの場合は、とても打ち解けてしまうものだ。それが、逆に反発しあうかのどちらかだ。

……いや、どちらでもない人もいるものだ。

そう初めて知ったのが、このミチルという存在。

ミチル。彼女は どうして現れたのだろうか。彼女は本当に吸血鬼なのだろうか。それとも、血を吸いたくなる病気に悩まされている人なのだろうか。

本物にせよ、そうでないにせよ、わたしはミチルの元で働く事になった。と、一言でしめてしまえば簡単なものだが、趣味やバイト、学業と、あまり余っている時間のないわたしに、突然働けと言うのは酷というものだ。

辞めるとしたら、趣味だろうかと泣く泣く考えたりもしたけれど、まあ、助けてやったのだから命をくれと言われないだけマシな事だ。それに、僅かばかりとはいえ、ちゃんとお金も貰えるようだったし、働けなくて困るよりはいいのではないか、と思うことにした。

ミチル。彼女を取り巻く世界は、これまでのわたしを取り巻いていた世界と何かが違う気がした。わたしが壁を作ってきた世界と、ミチルが造り出してきた世界。

これから先、わたしを取り巻く世界は、どういった味がするのだろうか。

……それを誰かに説明されたとしても、頑固で歪んだ目しか持てないわたしは、それを素直に捉えないのだろうけれど。

モノローグ 2 1

そういえば、小さい頃によく聞かされていた童話や昔話の中で、わたしは何故か「誰かが食べられる話」にすごく興味を持っていた事を覚えている。

山姥、赤ずきん、眠り姫、三匹の子ブタ、狼と七匹の子ヤギ、かち山……。

これらの話はとても心に残っていて、頭から離れなくて、子どものわたしは何度も何度も読み返して、何度も何度も登場人物になりきって、わたしは妄想の中で誰かに食べられていた。そして、恐怖と共に、恍惚に近い何かを感じていた。

それを感じると、まるで脳がとろけてしまったかのようにおかしくなる。いま自分がいる場所が夢なのか現なのかすら分からなくなってしまうって、普通の空想とは違う奇妙で独特で癖になりそうな味わいのある感覚に浸ることが出来て、わたしは取り憑かれたように何度も何度も読み返して、何度も何度も妄想していた。

そして、誰も知らない一人だけの世界に入り込んで、境目のない世界を行ったり来たりしていた。

そこには、わたしを怖がらせる幻覚もあったけれど、守ってくれる幻覚もあった。そこは、まるで、現実のようだった。そこでは、わたしの記憶は瞬時にすり替えられてしまっていた。

全てから解放された時に、わたしは現へと戻り、そして、たった今まで体感していたことを想起する。

わたしの身体に訪れるこのほとぼり、そして、身体全体を攫っていつてしまいたいようなこの感覚。

それが何なのか、幼いわたしはよく分からなかった。

そして、今でも、それが何だったのかはよく分かっていない。

エピソード2 1 人食い

その日、町を歩いていたのは、いつもの散歩ではなくて、バイトの関係だった。ついこの間までのわたしのバイトは、定時に来てノルマ達成までただひたすらタイピングをしておけばいいというだけの仕事。あまり外に出なくていい人見知りのわたしにうってつけのものであった。

だけど、わたしはその転職とも言えるバイトを涙ながらに辞めて、今の仕事、ミチルの店の雑用係をしなければいけない身の上となってしまうたのである。

「今の人生を辞めるのと、今のバイトを辞めるの、どっちがいい？」

美しい笑顔でミチルはそう言った。素晴らしいほどの女王様気質にわたしのマゾヒスト心がくすぐられ……することはなかったが、その言葉に逆らえるはずもなく、わたしは泣きながらその旨を雇い主に伝えたところ、彼は何の悶着もなくわたしを辞めさせてくれた。せめて引きとめてくれればよかったのだが、お前の代わりなんて幾らでも居るのだよとあの笑顔の裏にあったのだと思うと、もうどうにでもなれという気にもなってくる。

そんなわけで、今は、特に忙しそうでもないミチル女王様が、「この時間の商店街は人で混むから行きたくないんだよねー」と仰せになったので、代わりにわたしが買いだしに出ているところだった。ちなみに、持たされた額は三万円。その額に驚いたのだが、よくよく見れば、買い物リストは、スリッパ、巾着、瞬間接着剤、単四電池、ダブルクリップ、髪ゴム、ゲームソフト二本、マンガ三冊、文庫本一冊、ぬいぐるみを三つほど、プラモデル三セット、と、どう見ても公私混同しているリストであった。

買い揃えていくうちに、段々と持たされた額で足りるだろうかと不安になったが、普通に足りたので、非常に安心した。

さて、これらを買い揃えるのもしんどかったが、それらを持って帰るのもなかなかの苦行だった。

特に、ぬいぐるみは、買い物袋からはみ出してしまい、可愛らしい色遣いのうさぎやら猫やらくまやらが、愉快的顔をして町を見ているという状態に、行き交う年端もいかぬ子ども達のハートをわしづかみにし、何度も指をさされるという精神的な苦痛を与えてくる優れものだった。

そんな精神攻撃を掻い潜って、やっとこさ人気のない道へと出られたときは、もう泣きたいくらい嬉しかった。泣いたりはしなかったけれども。

そんな状態の自分に、わたしは未来を悲観した。たぶん、ミチルの店では長く働く事になるかもしれない。いつかは辞められる日も来るだろうけれど、それは随分先の事になりそうだ。

ああ、今まではよかった。自分に最も適した場所で、自分に最も適した仕事を黙々とやっていれば御手当てが貰えたというのに。

そういうわけで、メンタル面でも厳しい状態にあったわたしは、急ぎ足で帰路についていた。なにぶん、急ぎ足である。わたしの視界が狭くなるのは当然であり、他人とぶつからない事はほぼ奇跡に思えるほどだった。そんなわたしの視界が、人の姿をしっかりと捉えられたのは、完全に奇跡だろう。

それは、とても可愛らしい少女だった。猫娘という妖怪は有名だけれど、もしも猫娘が実在するのなら、間違いなく彼女だ。それくらい、猫に似ている少女だった。輝く目でじつとこちらを見つめているような気がしたけれど、まさかそんな事はないだろう。もし、見ていたとしても、わたしが見ていたから不審がっただけだ。通り過

ぎ際に見ただけだったけれども、赤いチェツクのワンピースがとも似合っていた。これに、もう少しスカート丈が短くて、黒いニースを履いていたらもつとよかった。

そんな変態的な要望を頭の中で浮かべながら（外に漏らさなかった事は賞賛すべきことである）、わたしは買い物袋を抱きかかえて、せつせと登り坂を登っていた。……しまった。人混みを避ける余り、登り坂を登って下るという無常なコースを無意識に選んでいた。

しかし、ここから戻るのもなかなかの苦行である。わたしはそのまませつせと登った勢いで、休みなく坂を登っていった。もう少しで下り坂に突入する。そうすれば、あともう少しで店だ。

と、その時だった。

わたしの視界に、ふと赤チェツクの模様が入りこんだ。

とつさにそちらを見やると、先程の少女がこちらを見ていた。そんなに歩いていないのかと思ったが、彼女を見たのはやはりもっと離れた場所だった。ただの似ている人かと思ったが、どう見ても同一人物だ。服もそうだし、顔も同じに見える。まさか、双子か？ あんなにかわいい子が二人もいるのか？ そう思いながら、わたしはせつせと登り、そして下り坂に突入した。

それにしても、買い物袋は重たい。この重たさが、そのままお金に換算されるといいのだけれど、そうはいかないのが世の中という奴だ。なんていう妙に達観した事を思いながら、わたしは下り坂をてくてく下っていった。下り坂というのは、登り坂よりも意外と疲れるものだ。筋肉痛にもなりやすいらしいと聞く。とか思っている間に、下りきった。ああ、もう早く店に着きたい。

と、思った時だった。

下っていった先の電柱の影に、赤いチェックの影。

思った通り、先程の少女とどう見ても同じ人がそこにいた。同一人物とは思えない。だって、わたしを通り越していった所なんて見なかったし、ここは一本道だ。路地なんてない。振り返っても、さっきいた位置にはいないし、どういうわけだろうか。

わたしは、ちょっと不気味に思い始めて、気付かないふりをしてそのまま少女の前を通り過ぎて行った。

エピソード2 人食い

店に戻ってすぐにミチルに言われたことは、「遅い！」の一言だった。ミチルはソファに横になって、白猫の抱き枕の「しろまめ」(よく店に来るお兄さんが命名)を抱きしめたまま、ものすごく寛いでいた。彼女は首をうんとあげて、やる気のなさそうな目でわたしをじっと見つめて言った。

「もう、遅いじゃない！ 御客もなかなか来ないし、予定も延期になったし、喋る相手もいなくて寂しかったんだからねっ！」

そんなツンデレ女子みたいな事を言われても、わたしにはどうしようもない。

「ちょっと道に迷っちゃって……っていうか、買う物が多すぎです」

「ああ、ああ、分かてる分かてる、しばらく買い物行ってなかったんでついね。それに、最近、物が必要な事が多くて……」

そう言っ、ミチルはけらけら笑った。全く笑い事じゃないのに。それに、何に使うのか分からないモノだらけで、それもまたわたしの気を削いしまう原因だった。だが、これ以上文句を言える立場でもない、ここはぐつと堪えてわたしは買って来たものをテーブルに並べる作業に移った。

ミチルは「しろまめ」を抱きしめたまま、ソファの上をゆらゆらと転がって、そして買い物の袋を開けるわたしに向かって、こう言い放った。

「あ、珈琲飲みたい」

「え？」

「珈琲飲みたいなあ〜」

「……」

溜め息は幸せが逃げるから辞めた方がいいよと小学生の頃に大人しくてませていた同級生が言っていたのだが、今回ばかりは溜め息を我慢する方が不幸せになりそうだったので、わたしは思いつき溜め息をついてやった。

そして、開きかけの買い物袋をそのままにして、立ち上がった。今座ったばかりなのに、とかいちいち不満を溜めたりしたらそれこそ幸せが逃げてしまうんだと自分に言い聞かせて、わたしはインスタント珈琲をしまつてある戸棚を開けた。

「種類は？」

「ユウナオリジナルで」

「適当に取りますよ」

そう言つて、わたしはインスタントコーヒーのモカブレンドを二つ手に取った。別にこれが飲みたかったわけではなく、たまたま手に当たったから二つとっただけの事だ。どうせ、ミチルも珈琲には特別こだわりのない。こだわりがなくてよかった。もしこだわりがあつたら、あれこれうるさく文句を言われていた事だろう。ただでさえあれこれ指示されているのに、この上、珈琲ひとつ入れるのにとやかく言われるのも辛いものだ。それなんて姑？

「ところでさ、ユウナ」

珈琲の香りが店に充満し始めた頃、ミチルがふいにわたしに話しかけてきた。

わたしが振り返ると、ミチルはじつとわたしの顔を見つめていた。その顔を見て、わたしは少し畏まった。ミチルのその目は、かつて公園でわたしを襲ってきた魔物らしき何かを追いついた時の、あの妖艶なお姉さんの目をしていた。

「今日、誰に遭った？」

「え？」

「今日、誰に遭ったの？」

その時、ミチルの目に全てを見通された気がしたのだけれど、だからといって答えないでいるのは何故だかとても勇気のいる事だった。わたしは勇敢でも向こう水でもないから、ミチルの問いかけに対して下手な抵抗をする事も出来ず、おずおずとしながら答えた。

「誰とも会ってはいないけれど……」

「けれど、遭ったでしょ？ 誰かに」

ミチルの目が訴えている。その目に見つめられているうちに、わたしは彼女の問いかけが何に對してなされているのかということに気が付いた。

「女の子……」

わたしが思い出したのは、帰路で何度も見かけた猫の様な女の子。同じ女の子を何回も見ただこと。そうだ。あの不気味な体験。まるで、あの少女が何人もいて、わたしを取り囲んでいたかのような感覚。思い出すだけで、その不気味さに身震いする。

「ただの女の子じゃないわね」

ミチルはくすりと笑って見せた。

「何度も見かけました……」

そう答えると、ミチルは立ち上がって、珈琲のカップを持つわたしの元へとやってきた。まだ熱いそのカップを一つ受け取ると、ミチルはわたしの髪をそつと撫でて、じつと見つめながら言った。

「気をつけなさい。あなたの知らない内に、あなたの影には沢山の闇が集まっていく」

「……どうということ……ですか？」

「あなたの魅力に集まってくるのは、可愛い蝶ばかりではないってことよ」

……もつと分かりやすい言葉で説明願っていたのだが、それは叶いそうもなかったので、諦めた。ミチルは秘密を抱え込んだまま、嬉しそうに珈琲カップを持ってソファに戻っていった。

わたしは、ああいう女性に近づかれたら、男子だったら堪らないだろうなーとのんきな事を考えながら、珈琲を一口飲んだ。淹れたばかりの珈琲は、わたしの舌にはとても熱くて、わたしの目から涙が少しだけ零れていった。

モノローグ 2

昔話や童話に出てくる食べる、食べられるというものが好きだった事はない。

だけど、そんな人は幾らでもいると思っていた。大人達はみな、食べられるという言葉に子どもが怖がると思っていたけれど、わたしは恐怖とは少し違う何かを感じていた。

食べる、食べられる。そこにあるのは、子どもながらに感じる、恍惚のようなもの。

寝ながらみる夢、起きながらみる夢の材料となりえる恍惚の一つだった。

成長した後も、食べる食べられるという関係に興味を持ち続けた。

生き物の捕食するシーン、捕食されるシーン。特に、「生きながら捕食される」生き物を、わたしはまじまじと見つめ続けた。映像であれ、実物であれ。

夢にさえ出てきた彼らの関係は、わたしにとっては憧れにも近いような何かが秘められていた。

生きた獲物を美しく芸術的に捕食する生き物達。

生きたまま苦しみもがきながら捕食される美しい生き物達。

いつしかわたしは、それを人間に置き変えて考えるようになっていった。

人が人を喰らう。眠り姫に出てくる義母のような人食いと、そんな人食いに愛されながら喰われていく羊たちをわたしは何人も想像し

た。

わたしの想像する限りでは、捕食する側も、される側も、女性だった。カニバリズムという言葉を知るのもう少し後だ。人肉という言葉は少し違う。食べる。食べられる。この二語に魅力を感じていた。

生きたまま獲物を捕食する美しい女。

生きたままもがき捕食される可憐な少女。

そして、いつしかわたしは、夢と現の狭間で何人もの少女を食らい、いつかは捕食する美しい女に成長できる事を夢見ていた。

エピソード 2 3 人食い

ミチルの店を一步出ただけでもものすごく異様な解放感が訪れるのはきつと、（主に）精神的労力を使い果たしているからに違いないとわたしは思っている。

なにはともあれ、今日の仕事も終わりだ。一体この仕事が幾らの価値があったのなんて分からないけれど、それでも今日は解放されたのだからどうだっていい。ちなみに明日も仕事だが、今日は解放されたのだから、どうだっていい。

今日、公私混同乱れる買い出しを済ませてしまったのだから、明日も買い出しに出されるということはないはずだ。一番苦手な事は人の多い場所へ行く買い物なので、とても有難いことだった。

この調子で、明日も明後日も終わって、早く休みを貰いたい。あれ、そう言えば、休みていつだろう。ちゃんと言われていない気がする……。

気を取り直して、今日の空はとても綺麗だ。夕暮れ空から月光の照らす夜空へと変わりゆく景色は、まるで世界の終わりのように美しかった。まあ、世界の終わりなんて見た事も体感した事もないから、こう美しいのなんて知らないのだけれど、世界の終りがこうだったらいいなという願望である。

アスファルトの道を歩くわたしの足元には、のっぺらとした影が伸びている。濃くもないし、薄くもない。こういう景色に囲まれていると、影にもまた何か意志でも宿っていそうだと感じてしまう。

そう言えば、昔は影が喋ったような気がするという想い出があった。

そんなの幻想だって分かっていたけれど、子どもならにとても怖い思い出なのは間違いないで、シャドウというものと、ゴーストというものは、同じものだと思っていた。

……と、その時、わたしの影が笑った気がした。勿論、これも気のせい。仮に笑ったとして、どうやってそれが影のものだと知れるのだろうか。そう冷静になれば、この状況も落ち着いて飲みこむことが出来るだろう。だけど、それは、落ちつけるような事態しか周りで起こっていない時に限るものだろうっていうことを、わたしはしっかりと学んだ。

今のわたしの目の前には、買い物の帰りに何度も見た少女がいた。それも、わたしの通り道のだ真ん中に。間違えるはずがない。こんな少女が何人もいるなんて想いはしない。やっぱり、同じ人物。何回も、何回も、今日のわたしをじっと見つめていた。でも、全部同じ人物なわけがない。彼女が瞬間移動でも出来ない限り、そんな事は不可能だ。

猫の様な目。少女の目は、暗闇で出会った野良猫の目に、そっくりだった。

じっと見つめてくるその目は、まるで何かを訴えているかのようにだった。

「ねえ、わたしに何か用？」

わたしはついに訊ねた。訊ねない方がいいような気配を持っているのは確かだったけれど、そんな事に構っている余裕もなかった理由は、ミチルの店で着実に精神が削られていったからに他ならない。もしもわたしがこれまで通りの仕事をしていたなら、こんな異様な

登場をする少女に話しかけたりなんてしないものだ。

少女はじつとわたしを見つめていた。

猫の様なその目は不気味に輝いていた。まだ、野良猫の目の方が有効的な輝きをしているものだと思いついた時には、もう遅かった。

「あなた、人間？」

初めて聞く彼女の声。

何度も何度も姿を見せられておいて、声を聞いたのはこれが初めてだった。小さい身体のわりに、ハスキーな声。少女らしさ溢れる姿のわりに、少年かと思うような声。

そのハスキーボイスが発した言葉が、「あなた、人間？」だと。これが異常でないはずがない。

けれど、話しかけたのが自分である以上、わたしも答えるしかなかった。

「もちろん。あなたは違うの？」

これが怖い話とかだったら、あまり聡明でない事を質問している気がする。

明らかに幽霊っぽい女の子に「あなたは人間じゃないの？」なんて率直過ぎるし、色々な意味で即終了となってしまっただろう。そうして、わたしは行方不明の人物となってしまうのだ。

だが、目の前の女の子は、そんな恐怖の対象となり得る存在でもなかった。

「もちろん、人間だよ！」

につこりと笑う顔は、誘拐したいほど可愛かった。

そんな危険な発想をしているとはつゆ知らず、少女は無垢にわたしに自己紹介をしてきた。

「ノラコっていうの。あなたは？」

「わたしは、ユウナ」

自分から自己紹介するなんて、律儀な子だ。

なあんで、悠長な事を思っていたのだけれど、ふと思い出した。話してみればいかにも普通の少女のようだけれど、考えてみればこのノラコとかいう子は、何度もわたしの視界に入ってきた少女だ。まるで、幽霊のように、瞬間移動して何度も、何度も、わたしの視界に入ってきた。

そんな子が、ただの人間であるはずがない……と思うのだけど。

「ユウナ……」

ノラコはわたしの名前を呟くと、猫の目をきらりと光らせた。

「ユウナ、吸血鬼の店から出てきたよね」

「え……？」

「だけど、吸血鬼じゃない」

ぴんときた。やっぱりこの子はただの人間なんかじゃない。だいたいい、瞬間移動しちゃうような人が、ただの人間なわけがない。幽霊か妖怪の類以外にあり得ない。

そっだ……。ミチルに借りを作ってしまった時、わたしは魔物っぽい何かに襲われた。もしもこの少女がそういう類の生き物なのだとしたら、今のわたしは絶体絶命の大ピンチなんじゃないだろうか。

「ノラコね、吸血鬼に嫌われているの」

「吸血鬼って……」

「分かっている癖に。ユウナは、あの女性ひとの非常食なんですよ？」

非常食って言い方はすごく気が滅入る。

やっぱり、ミチルがわたしを雇ったのって、いつか血を吸うためののだろうか。

そういえば、そういう感じの事を言っていた気もしないでもないのだけれど……。ああ、こういう事はあまり考えない方がいいのかもしれない。

どうせ、逃げたりしたら追いかけて、血を吸われてバッドエンド。どうせなら、ミチルの気が変わるのを期待しながら働き続けた方がよさそうだ。

って、そんな事考えている場合じゃなさそうだ。

「この世界ってさ、弱肉強食なんだよね。だからさ、他人のモノ獲ったりしたって、獲られた方が悪い事になっちゃうの」

「弱肉って……あの、君は、人間なんだよね？」

すぐさま、ノラコが喰いつくようにわたしを見上げた。

八重歯がむき出しになって、全身で異議を唱えているのがよく伝わってきた。

「ノラコって言ったでしょ？」

「ごめん……ノラコは、人間なんだよね？」

気を取り直して訊ねると、ノラコは大きく頷いた。しかし、その目はやっぱりぎらぎらと光っていた。

「でもね、人間っていろいろ種類があるんだよ」

「種類？」

「ユウナだって、普通の人間じゃないでしょ？」

でしょ？と言われても、なんとも返答できない。確かにミチルにはそういう感じの事を言われたけれど、だからといって普通でないのだとも断言出来ない。

何も言わないでいると、ノラコはふうんと何かを納得したかのようにわたしをじっと見つめてきた。

「ノラコはね、特別なんだよ」

「とくべつ……」

特別という言葉が、まるで全く知らない言葉のようだった。

特別でないなんて言うわけではない。だって、話しかけるまでは幽霊なんじゃないかって思う程異質な存在感を放っていたような人物だ。これが普通なわけではない。

ただ、彼女の言う特別は、何処か、陰鬱的な響きを持っていて、何だかとても不気味だった。

「どう特別なのか、知りたい？」

ノラコの訊ね方は、まるで、小さな子どもが何か秘密を持って、大人に教えたがっているかのようだった。そんな無邪気な態度に、不気味な雰囲気がかぶさって、異様な空気を産みだしている。

そんな中で、わたしはノラコに訊ねられるまま、ゆっくりと頷いた。

ノラコは嬉しそうに笑うと、極々小さな声で、割れやすいモノを地面に置くように慎重に、丁寧に、繊細に、ひとことの告白をわたしにした。

「ノラコはね」

その瞬間、まるで、わたしとノラコ以外は時間を止めてしまったかのようにだった。

「人食いな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9333x/>

U - N a

2011年12月28日01時46分発行